

小学校英語活動から中学校英語学習への適応に関する振り返り調査

The Adaptation to Junior High School English Studies: A Survey of Students who Experienced Elementary School English Activities

長沼君主

Naoyuki NAGANUMA

東海大学

Tokai University

Abstract

This study investigated factors which effected how well junior high school students who had participated in elementary school English activities adapted to junior high school English studies. The survey suggested that the student's motivation for studying English reflected the attitudes of their parents. Also, the survey showed that high achieving students adapted more easily to learning styles and assessment procedures common in junior high school studies than low achieving students. The survey suggested that the elementary school curriculum should include activities which foster integrative motivation as well as intrinsic motivation.

Keywords

Adaptation to Junior High School, Elementary School English Activities

1. 研究目的

平成23年度より全国公立小学校で高学年において外国語活動が必修化され、平成24年度には英語活動を経験した児童が中学校で教科としての英語を学び始めた。長沼・小泉(2012)では、小中教員を対象としたアンケート調査結果から小中連携の課題を考えたが、本研究では、ベネッセ教育総合研究所(旧 Benesse 教育研究開発センター)との共同研究のもとで行った「小・中学校の英語教育に関する調査」¹⁾における中学校1年生を対象にした小学校英語活動の振り返り調査を通して、小中英語教育の現状と課題を探っていく。また、同時に行った保護者調査結果も考察し、家庭での支援や保護者の意識がもたらす子どもの学習への影響についても探っていく。

2. 調査概要

調査にあたっては、ウェブ調査会社を通して、全国約231万人のモニター母集団のうち、公立中学(国立、及び公立中高一貫校を除く)1年生とその保護者にアンケート協力を依頼した。調査は2011年10月に行われ、2,688組の親子(男子1,343組、女子1,345組)の回

答を得た。調査アンケートは生徒調査42項目、保護者調査16項目からなり、長沼・小泉(2012)のアンケート調査項目及びベネッセ教育総合研究所の「第1回中学校英語に関する基本調査(教員・生徒調査)」²⁾や「第1回小学校英語に関する基本調査(教員・保護者調査)」³⁾における調査項目を参考にして作成された。

3. 調査結果

3.1 成績や授業理解度と情意的態度との関連性

調査結果の分析にあたって、保護者調査で尋ねた中学校1年生時点での子どもの夏休み前の英語の成績(Q49)から、生徒を上位群：748名(28.2%)、中上位群：701名(26.4%)、中位群：626名(23.6%)、中下位・下位群：582名(21.9%)に群分けを行った(無回答など31名は除く)。生徒調査において、中学校での授業理解度を尋ねた結果(Q36)、これら回答者のうち、31.7%が「ほとんど」、33.5%が「70%くらい」、23.0%が「半分くらい」、11.9%が「30%以下」の理解度であると回答しており、3分の2程度の生徒は授業を概ね理解している様子であった。英語の成績と授業理解度の相関係数は.733と、比較的高い一致を示していた。

一方で、英語が得意だという意識(Q1-3)に関しては、「とてもそう思う」が11.1%、「まあそう思う」が32.6%、「あまりそう思わない」が34.5%、「まったくそう思わない」が20.6%と肯定的回答が4割程度であり、否定的回答が上回っていた。英語が得意だという意識と授業理解度との相関係数は.665、成績との相関係数は.555といずれも中程度の相関であり、授業理解度が必ずしも低くないにもかかわらず、英語が得意であるといった能力への自信、すなわち、有能感に結びついていないことが見て取れる。実際に、授業をほとんど理解している生徒の82.1%が肯定的回答であったのに対して、70%程度理解している生徒では47.2%に落ち込み、理解度が半分程度で9.5%、30%以下では2.2%と、中学校での定着を前提とした学習スタイルへの切り替わりから、ほぼ完全に授業を理解していないと有能感を得づらい状況が示唆される。成績との関連においても、成績上位群の22.9%、中上位群の47.4%、中位群の73.9%、中下位・下位群の88.5%が否定的回答を示しており、英語への苦手意識を持っていた。

それではこうした授業理解や有能感と、中学校での学びへの肯定的態度との関連はどうか。「学校で学ぶ英語が好きか」どうかという意識(Q1-1)を尋ねたところ、「そう思う」が13.9%、「まあそう思う」が43.5%、「あまりそう思わない」が32.1%、「まったくそう思わない」が9.8%であり、半数以上が肯定的な回答を示していた。授業理解度や有能感などの要因に加えて、英語そのものが好きという意識の影響を見るため、「学校外で日常的に触れる英語が好き」(Q1-2)という要因を加え、学校で学ぶ英語が好きだという意識を目的変数として重回帰分析を行った結果、重相関係数は.677と比較的高い説明力を示した。各要因(説明変数)の標準化係数は、英語が得意という意識が.413、学校外の英語への情意的態度が.221、授業理解度が.196と有意であったのに対して、成績からの影響は-.041であり、有意ではなかった(図1)。英語学習への肯定的態度は、学校外で触れる英語への肯定的態度よりも、英語が得意であるという有能感が大きく影響しており、英語の成績そのものというよりは、授業を理解しているという意識が有能感とともに、学校での学びへ

の肯定的態度へと結びついていることが示唆される。

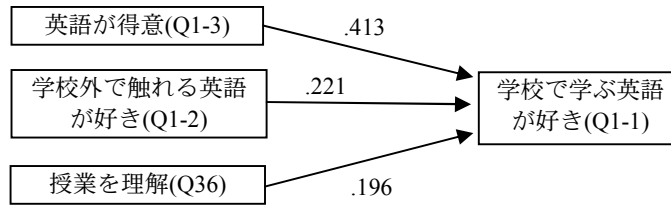


図1 学校での英語学習への肯定的態度に及ぼす要因の重回帰分析結果

長沼(2007)では、高校生を対象に行った振り返り調査結果から、小学校以前に英語学習を経験した生徒では、中学において54.5%が英語学習への肯定的な態度を持っていたのに対して、経験していない生徒では肯定的な回答は38.1%に留まったとしている。今回の調査でも肯定的な回答(Q1-1)が57.4%と、同様に肯定的な傾向が観察された。ただし、酒井(2009)の中学校2年生を対象に行った調査結果からは、最もやる気の高かった時期が中学校1年生の始め頃(43.6%)であるのに対して、最も英語を苦手と感じるようになった時期は中学校1年生の後半(26.6%)とされており、本調査実施時の中学1年生の後半にかけて情意が大きく変動している可能性がある。同調査では苦手と感じた時期が中学入学前との回答が11.7%であるのに対して、中学校入学以降から中学校1年生の後半までの間の回答の割合を合計すると66.0%となっている。中学校2年生時点での授業理解度は、「ほとんどできる」が14.7%、「70%くらい」が25.9%、「半分くらい」が32.8%、「30%以下」が26.4%であり、70%以上理解している生徒は40.6%と本調査の中学校1年生と比較して低い値となっている。

同様の指摘はKonishi(1990)でもなされており、英語が苦手だと感じる意識が中学校入学時の4月から9月までの半年間に大きく上昇するとしている。長沼(2007)では、高校では小学校以前に英語学習を経験している生徒でも英語学習への肯定的回答が35.0%、経験していない生徒では26.9%と、高校生になっても依然として差は見られるものの、中学時の57.4%からは低下しており、未経験者との差も縮小し、小学校以前の英語学習経験の肯定的影響が薄れていることが分かる。中学1年生の夏以降で授業理解が低下し、つまづきを覚え、英語に対する有能感を失うことで、小学校英語活動での肯定的英語体験の影響が徐々に薄れていくことがないように、英語が得意という「できる感」を保持していくことが小中連携における課題となるであろう。

3.2 小学校英語活動を経験した生徒の中学校における英語学習動機づけ

それでは、小学校英語活動を経験した生徒の中学校での英語学習動機づけはどのようなであろうか。生徒調査における英語の学習理由を尋ねた項目(Q38)の下位項目を最尤法、プロマックス回転にて因子分析した結果、5因子が抽出された。回転前の説明分散は64.2%であった。第1因子は海外の人と友人になりたいややり取りをしたいといった「友好・

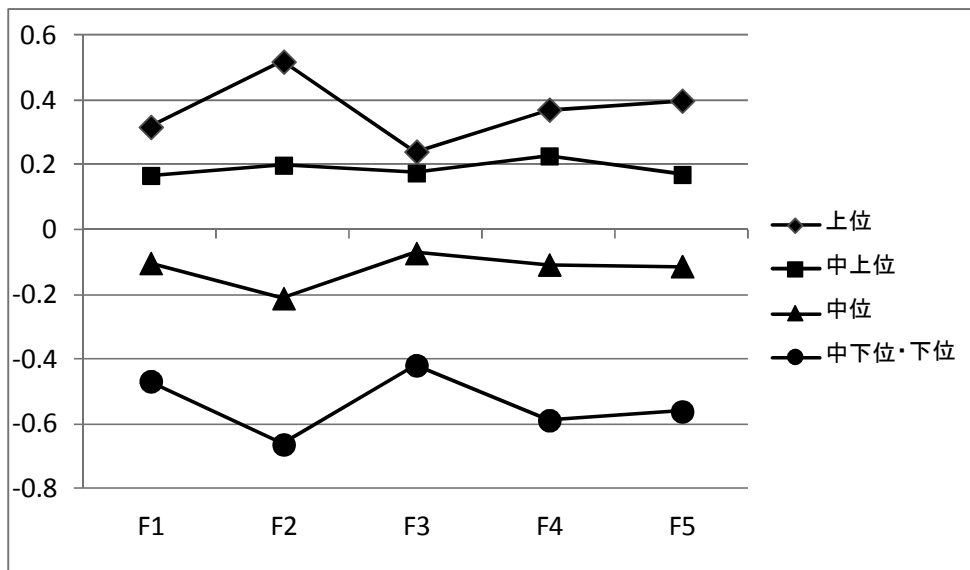
コミュニケーション動機」, 第2因子は英語が好きといった「内発的動機」, 第3因子は先生がはげましてくれるなどの「関係性動機」, 第4因子はテストや入試などの「外発的・道具的動機」, 第5因子は国際社会での必要性といった「国際的・職業的動機」であった(表1)。

英語成績群別に因子得点を比較した結果, どの因子においても成績との関連が見られ, とりわけ, 「英語が好き」や「英語の勉強がおもしろい」といった内発的動機づけが, 上位群で最も高く, 中下位・下位群で最も低かった(図2)。上位群と中上位群とを分けているのは, 必ずしも英語を使って実際にコミュニケーションをしたいといった友好・コミュニケーション動機ではなく, 内発的動機, または, 国際的・職業的動機であることが見て取れる。

表1 中学校における英語学習動機づけ因子分析結果

	F1	F2	F3	F4	F5
19 外国の人と友だちになりたいから	.922	-.002	-.005	.009	-.148
17 世界の様々な国の人とコミュニケーションを取るのに使いたいから	.902	-.013	-.019	-.032	.048
18 英語の歌や映画がわかるようになりたいから	.815	.017	-.054	.072	-.081
16 英語を話す国に限らず外国の人々, 文化, 社会一般に関心があるから	.803	.022	.025	-.036	.056
12 将来, 海外で働きたいまたは暮らしたいから	.606	-.020	-.013	-.093	.145
10 外国を旅行するときに使いたいから	.602	.056	-.019	.003	.126
1 英語が好きだから	.033	.947	.031	-.041	-.030
2 英語の勉強がおもしろいから	.032	.942	.057	-.035	-.051
15 英語をできるようになるのがうれしいから	.287	.288	-.006	.163	.232
4 英語の先生や親がはげましてくれるから	-.071	.023	.903	-.022	.023
3 英語の先生が好きだから	-.048	.315	.612	-.111	.005
5 友だちも英語の勉強をがんばっているから	.055	-.105	.598	.233	.002
6 英語ができるとかっこいいと思われるから	.289	-.002	.335	.180	.018
7 英語のテストでいい点を取りたいから	-.093	.180	-.062	.898	-.048
8 できるだけ良い高校や大学に入りたいから	-.024	-.035	-.048	.643	.230
9 英語の成績が悪いと先生や親にしかられるから	.097	-.287	.183	.399	-.123
13 英語はこれからの国際社会で必要となると思うから	.108	-.062	-.005	-.060	.882
14 英語を勉強すると視野が広がるから	.239	.025	.031	-.039	.659
11 将来, 日本で就職するときに役立つから	.117	-.039	.029	.086	.631

F1: 友好・コミュニケーション動機, F2: 内発的動機, F3: 関係性動機, F4: 外発的・道具的動機, F5: 国際的・職業的動機



F1: 友好・コミュニケーション動機, F2: 内発的動機, F3: 関係性動機, F4: 外発的・道具的動機, F5: 国際的・職業的動機

図2 英語成績群別英語学習動機づけ因子得点平均値比較

動機づけと成績のより詳細な関係を調べるため、動機づけの因子得点によって、生徒を対象にウォード法によりクラスター分析を行った結果、動機づけのパターンによって、6つのグループに分かれた。それぞれのグループを成績順に GP1～GP6と並びかえたグループの成績群比率を図3に、成績順のグループの動機づけの因子得点平均を図4に示す。各クラスターの中上位層以上の成績比率(および人数)を見ると(図3)、GP1 (247人)が80.6%, GP2 (509人)が64.6%, GP3 (571人)が51.5%と比率が高く、GP4 (342人)が39.8%, GP5 (516人)が29.1%, GP6 (472人)が21.2%と比率が低くなっている。

動機づけのパターンを成績の高い順に見ていくと(図4)、最上位の GP1ではすべての因子で動機づけが高いのに対して、2番目の GP2では3番目の GP3と比べて、F5の国際的・職業的動機が高く、また、F1の友好・コミュニケーション動機、F4の外発的・道具的動機も準じて高いのに対して、GP3では F2の内発的動機や F3の関係性動機が相対的に高いという逆の関係が見られることがわかる。GP2では GP3と比較して、単純に好きやおもしろいという情意の高さだけではなく、国際的動機や友好動機など具体的な目標が育ちつつある様子が見て取れる。

一方で、GP4では F4の外発的・道具的動機が強く出ており、GP5と比べると F1の友好・コミュニケーション動機や F3の関係性動機など、対人的交わりに対する情意的態度が低くなっている。GP5では内発的動機づけが落ち込んでいるが、GP3と比べてその他の要因では大きな差は見られなかった。最下位の GP6では全般的に動機づけが低く、最上位の GP1と正反対の結果となった。

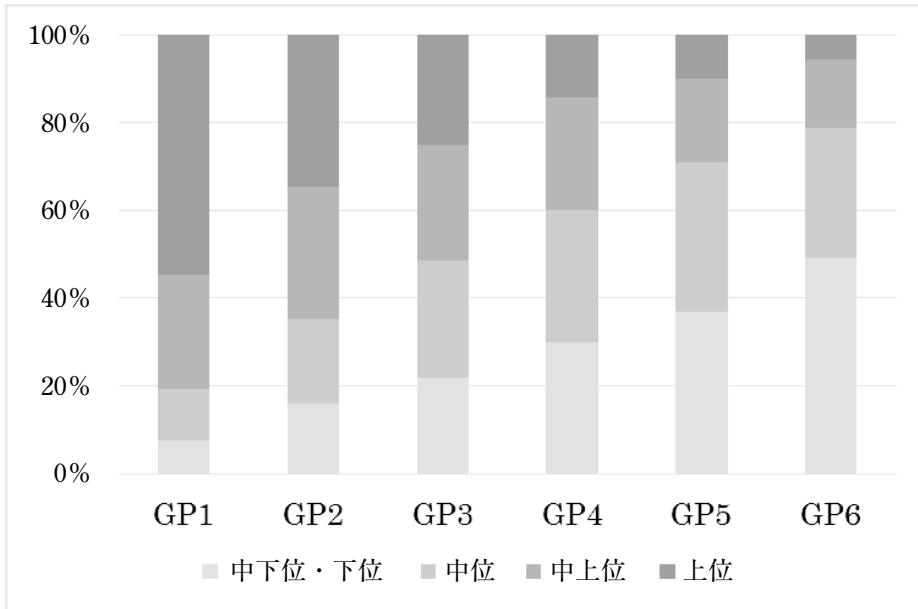
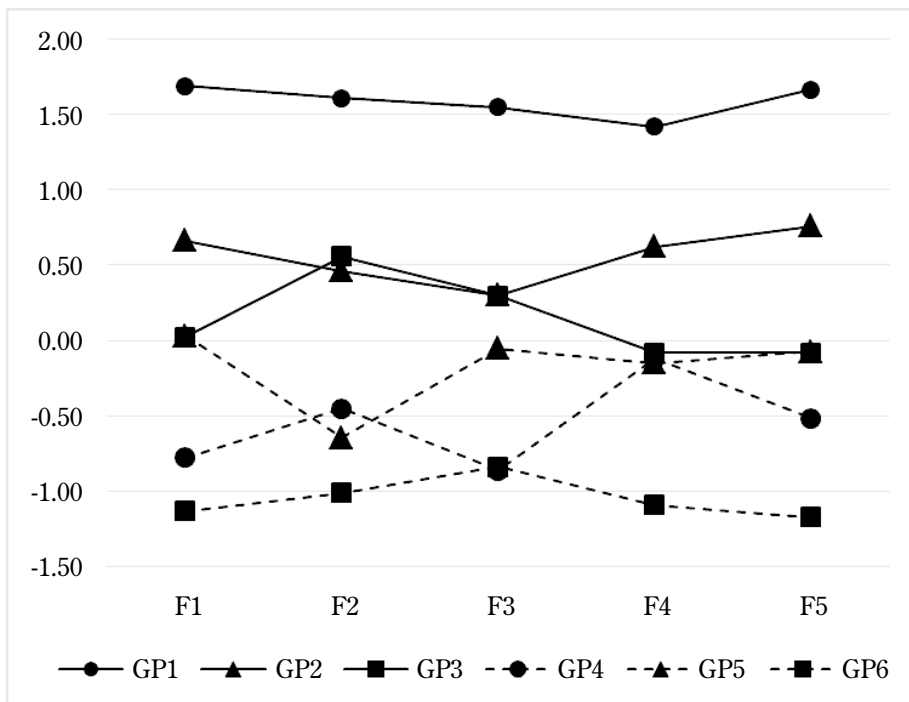


図3 クラスター別成績分布



F1: 友好・コミュニケーション動機, F2: 内発的動機, F3: 関係性動機, F4: 外発的・道具的動機, F5: 国際的・職業的動機

図4 クラスター別動機づけ因子得点平均

F2の「英語が好き」「英語の勉強がおもしろい」という内発的動機を中心に見ていくと、大きく3群に分かれ、最上位のGP1が飛び抜けて高く、GP2とGP3がそれに続きほとんど差がなく、平均を上回って高く肯定的であるのに対し、GP4とGP5では平均より低く、さらにやや下に最下位のGP6が位置していた。GP1～3は高動機群、GP4～6は低動機群と考えられる。GP2とGP3を分けているのは、F5の国際的・職業的動機、F1の友好・コミュニケーション動機、F4の外発的・道具的動機であり、目的意識が成績の高さにつながっていることが示唆される。

一方で、それらの目的意識が高くなっている状況では、GP3とGP5の比較からわかるように、F2の内発的動機が成績の高さに寄与している。他方で内発的動機の高くないGP4とGP5では、F4の外発的・道具的動機と、F1の友好・コミュニケーション動機やF3の関係性動機の高さが、成績の差につながっていることが読みとれる。GP1は全般的高動機群、GP2は目標志向高動機群、GP3は情意志向動機群であるのに対して、GP4は道具志向動機群、GP5は対人志向低動機群、GP6は全般的低動機群と言えるだろう。

英語が得意かどうかの有能感(Q1-3)の平均値をグループごとに比較した結果(図5)、高成績群、高動機群ほど高い傾向にあった。因子分析の結果(表1)を見ると「英語ができるようになるのがうれしいから」(Q15)という項目は、どの特定の因子というよりは、F2の内発的動機のほか、F1の友好・コミュニケーション動機やF5の国際的・職業的動機とも関連して因子得点があらわれており、有能感へと動機づけるには友好的動機や国際的動機といった具体的な目的志向を高めていくことが望まれる。

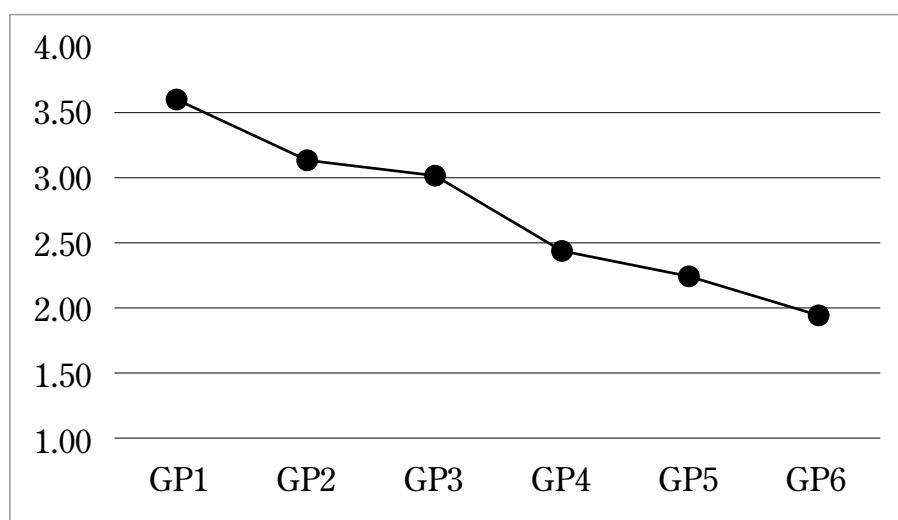


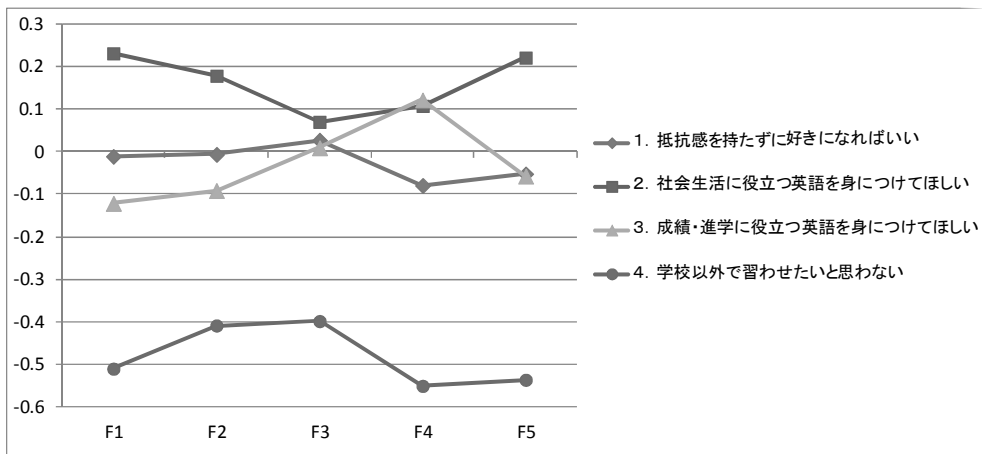
図5 英語に対する有能感のクラスター間比較

3.3 保護者の英語学習への態度が子どもの英語学習への動機づけに与える影響

こうした中学での英語学習への態度はどのようにして養われるのであろうか。保護者調査の結果からは、子どもの英語学習への動機づけには保護者の英語学習への態度の影響が

見られた。保護者の持つ子どもに学校外で英語を学ばせる目的(Q56)と子どもの英語学習動機づけ因子得点の平均を比較した結果を図6に示す。保護者が「社会生活に役立つ英語を身につけてほしい」と考えている場合が子どもの動機づけが全体に高く、F1の友好・コミュニケーション動機やF5の国際的・職業的動機が特に高い結果となった。一方、「成績・進学に役立つ英語を身につけてほしい」という保護者では、子どももF4の外発的・道具的動機が高い傾向にあり、F1の友好・コミュニケーション動機やF2の内発的動機は低い傾向にあった。保護者がコミュニケーション志向なのか、成績志向なのか、子どもの動機づけにも反映していることがわかる。

他方で、保護者が「抵抗感を持たずに好きになればいい」というあいまいな目的を持っている場合、子どもの動機づけパターンにも特徴は見られず、「学校以外では習わせたいと思わない」という保護者では、全般的に動機づけが低い傾向が見られた。



F1: 友好・コミュニケーション動機, F2: 内発的動機, F3: 関係性動機, F4: 外発的・道具的動機, F5: 国際的・職業的動機

図6 保護者の英語学習への態度と子どもの動機づけ

さらに、子どもの成績の5段階による相対評価での回答の平均を比べたところ、「社会生活に役立つ英語を身につけてほしい(28.8%)」と考える親の子どもは成績の平均が3.68と最も高く、「成績進学に役立つ英語を身につけてほしい(35.1%)」が3.55、「抵抗感を持たずに好きになればいい(27.4%)」が3.42と続き、「学校以外で習わせたいと思わない(8.7%)」が3.07と最も低い傾向にあった。子どもの動機づけのクラスターと成績(図4)との関連でも、F4の外発的・道具的動機が、F2の内発的動機よりも高いGP4やGP5では、共に高いGP2や内発的動機の方が高いGP3よりも成績が低く、子どもの動機づけと成績との関連と保護者の子どもの英語学習への態度と子どもの成績との関連の間に同様の傾向が見られた。

また、小学校での英語学習の必修化に関して(Q57)、「家庭でサポートしなければいけない(33.7%)」と回答した親の子どもは成績の平均が3.64と最も高く、「小学校で学ぶなら十分(43.7%)」がやや下回り3.53であり、「どちらとも言えない・わからない(22.5%)」が3.30

と最も低く、親の無関心や家庭でのサポートの欠如が子どもの英語学習に影響を及ぼしている可能性があることが示唆される結果となった。

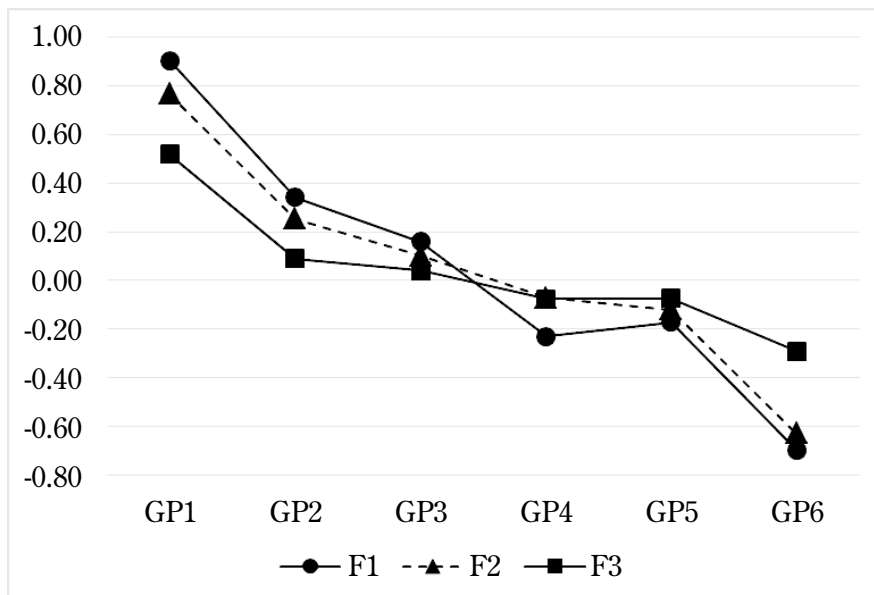
3.4 中学校での英語学習への適応と授業における連携の工夫

中学校の授業への適応について調べるため、小学校と中学校の授業の違いに対する意識について肯定的かを尋ねた項目(Q37)の下位項目を最尤法、プロマックス回転にて因子分析した結果、3因子が抽出された(表2)。回転前の説明分散は49.9%であった。第1因子は「14 定期テストや成績があること」、「17 勉強する内容や種類が多いこと」「16 予習や復習、宿題などがあること」といった「評価・学習量」因子(表2の項目11～17)であった。第2因子は「9 単語や文章を覚えること」「8 読み書きをすること」「7 繰り返し練習すること」「10 文法を学ぶこと」など、「読み書き・文法」因子(表2の項目7～10)であった。第3因子は「4 読み聞かせがないこと」「3 歌やゲームが中心でないこと」「2 ALTの授業が少ないこと」「6 話す時間が少ないこと」といった「非小学校英語活動」(表2の項目2～6)因子であった。

表2 小学校と中学校の授業の違いに対する肯定的意識因子分析結果

	F1	F2	F3
14 中間や期末などの定期テストがあること	.917	-.083	-.050
15 通知表で成績がつくこと	.901	-.092	.004
17 勉強する内容・種類が多いこと	.869	-.039	-.023
16 予習や復習、宿題などをしなくてはいけないこと	.822	.022	-.052
13 英語の授業時間が多いこと	.571	.133	.026
12 教科書の進み方(授業のペース)が速いこと	.493	-.043	.279
11 教科書や授業で勉強する会話の文・文章などが長いこと	.491	.317	.018
9 単語や文・文章を覚えなくてはいけないこと	.120	.857	-.170
8 話したり、聞いたりだけでなく、読んだり、書いたりすること	-.070	.782	.048
7 授業で同じことを繰り返し練習すること	-.119	.629	.080
10 文法(文のルール)を学ばなくてはいけないこと	.293	.624	-.082
4 英語の絵本などの読み聞かせの時間がないこと	-.034	.036	.798
3 歌やゲームなどが授業の中心ではないこと	.137	-.006	.715
2 外国人の先生(ALTなど)の授業が少なくなったこと	-.014	-.117	.576
6 授業中に英語を話す時間が少ないこと	-.065	-.044	.508
5 音だけではなく、文字を使う勉強が増えたこと	.003	.397	.446
1 日本人の先生が中心となって教えていること	-.001	.173	.374

F1: 評価・学習量, F2: 読み書き・文法, F3: 非小学校英語活動



F1: 評価・学習量, F2: 読み書き・文法, F3: 非小学校英語活動

図7 小学校と中学校の授業の違いに対する意識成績群別平均

これらの因子得点の平均をクラスター分析による動機づけパターンの成績順グループごとに比較した結果(図7), 全般的に成績が高く, また概して動機づけも高くなるにつれて, すべての因子において中学校での学習への肯定的態度が高くなっていった。3つの因子を比較すると, F1の「評価・学習量」F2の「読み書き・文法」F3の「非小学校英語活動」の順に肯定的意識が高かった。

F1の「評価・学習量」に関してはグループ間の傾きが大きく, とりわけ, GP3とGP4の間で落ち込みが見られ, 内発的動機づけ(図4)がGP3とGP4の間で開きがあったのと呼応していた。また, F2の「読み書き・文法」は, 成績や動機づけと緩やかに関係しており, 文字や文法などが明示的に導入される中学校での学びへの適応が影響していることがわかる。それに対して, F3の「非小学校英語活動」は, GP2からGP5まであまり大きな差はなく, 比較的上位層でも小学校的学びを望む声がある一方で, 成績や動機との関連は薄かった。

こうした授業スタイルや学習スタイルの違いに加えて, 中学校での生活や英語以外の教科も含めた全般的な学習への適応の度合いはどうであろうか。保護者調査で最近の様子について尋ねた結果(Q48)を図8に示す。中学の生活のリズム, 先生や友人関係面での適応については英語の成績別に大きな差はなく, 全般的に高い値を示したものの, 授業内容理解や宿題やテスト勉強などの計画的学習に関しては, 英語の成績と相関があることが分かった。必ずしも英語に限らず, 学習全般での不適応の問題をかかえていることがわかる。

それではこうした中学校での授業や学習スタイルの変化に対する学校側の授業における対応に関してはどうであろうか。中学校の授業における小学校の英語活動を意識した活動の有無について尋ねた結果(Q27), 特になしとの回答が16.7%であった一方で, 「授業の違いを説明する」のみで他には特になしとの回答率が17.4%であり, 特になしと合わせると

34.1% が具体的な活動の工夫を受けていないことが分かった。具体的な連携の工夫(図9)で最も多かったのは小学校で習った単語を確認したり、文字の前に音に触れさせたり、文法説明の前に活動を行うといった内容で、小学校で行った活動を取り入れたりするなどのより積極的な工夫はあまり見られなかった。授業内容の比率を尋ねたところ、入学当初の時点で(Q26)、教科書通りが59.3%、教科書以外の教材が28.7%、小学校英語でやっていたような活動が12.0%であり、小学校英語を意識した活動の比率は入学当初から高くなく、夏休み後の授業では(Q30)、それぞれ、64.8%、28.8%、6.4%と、さらに減少傾向にあることがわかった。

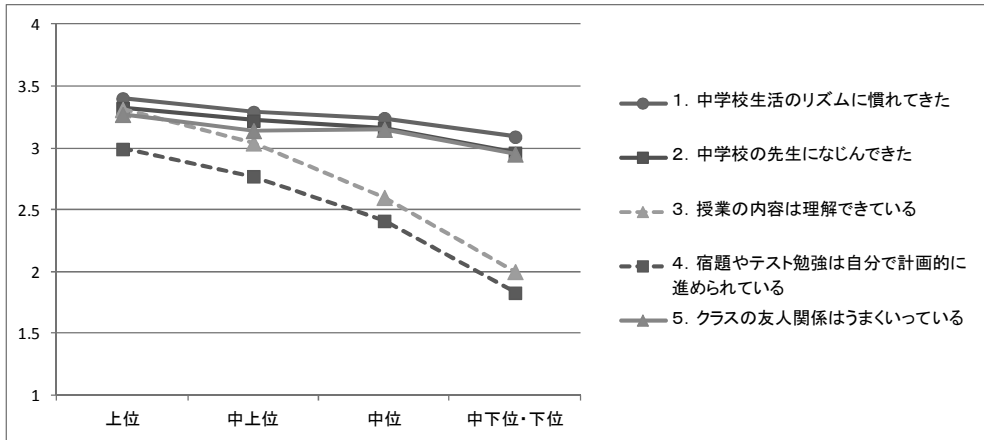


図8 中学校生活・学習への適応成績別平均

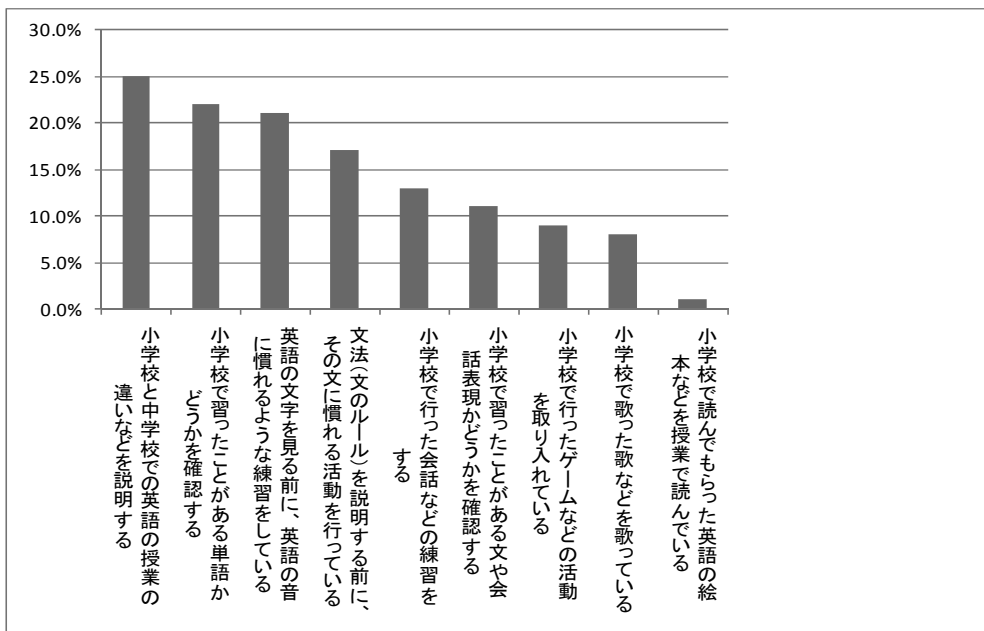


図9 中学校授業における小学校英語活動との連携の工夫比率

4. 小中連携に向けての提言

本研究において、中学校1年生を対象にした振り返り調査とその保護者への調査を通して、小学校英語活動開始後の中学生の情意的態度や中学の授業への適応について考察を行った。中学校1年生の夏休み後の時点では、学校での英語学習への肯定的態度は比較的高く、英語を得意と感じる有能感が学校外の英語への肯定的態度や授業理解よりも影響を及ぼしていることがわかった。英語学習への動機づけとの関係においては、成績群との明確な関係が見られ、小学校の英語活動を通して、内発的動機づけを育てるだけでなく、友好・コミュニケーション動機や国際的・職業的動機といった具体的動機を育てていくことの重要性が示された。こうした動機づけの育成には保護者の英語学習への支援的態度も影響しており、学校と家庭の両面での関与が必要であることが考察される。

他方で中学校での授業への適応に関しては、成績との一定の関係が見られ、とりわけ、小学校から中学校への評価の変化への意識において差が見られる結果となった。「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」(文部科学省, 2011)では、「生徒に求められる英語力について、その達成状況を把握・検証する」ことが提言され、中学校や高等学校において、各学校が Can-Do リストの形で学習到達目標を設定する動きが広まりつつあるが、小学校英語活動での評価と中学校での評価をつなぐためにも、中学校での数値による量的評価の前に、小学校の英語活動の段階での質的評価の導入により、学習の目標を意識させ、自律的態度を身につけさせ、自己効力を高める工夫が必要であろう(長沼, 2011)。それは中学においても同様であり、量的評価の裏付けとなる質的評価の工夫により、小学校英語活動との連携を図ると同時に、中学校における授業のあり方も見直し、より有機的なつながりをもたらせることが求められるであろう。現在は小学校の英語活動との具体的なつながりはさほど見られていない状況であるが、今後の中学校教科書の改訂においても、Can-Do リストの導入のみならず、より具体的な活動の連携の提案が含まれることが期待される。

注

- 1) http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/syochu_eigo/2011/soku/
- 2) http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/chu_eigo/hon/
- 3) http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/syo_eigo/2006/

参考文献

- Konishi, M. (1990). Changes in motivation for English language learning: A series of four measurements.『語学教育研究所紀要』第4号, pp. 1-23.
- 酒井英樹 2009.「中学生の英語学習状況と学習意欲」『第一回中学校英語に関する基本調査(教員調査・生徒調査)』, pp. 50-57. ベネッセ教育総合研究所.
- 長沼君主 2007.「日本の高校生の英語学習に対する小中高での情意変化と動機づけ」『東アジア高校英語教育 GTEC 調査2006報告書』, pp. 21-35. ベネッセ教育総合研究所.
- 長沼君主・小泉仁 2012.「小中連携における小学校英語活動に関する小中教員意識差」『ARCLE REVIEW』No.6, pp.22-32. Action Research Center for Language

Education.

長沼君主 2012. 「小学校英語活動における自律性と動機づけを高める Can-do 評価の実践」
『ARCLE REVIEW』No.5, pp.65-74. Action Research Center for Language
Education.

文部科学省 2011. 「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策～英語を学
ぶ意欲と使う機会の充実を通じた確かなコミュニケーション能力の育成に向けて～」

Available: http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afldfile/2011/07/13/1308401_1.pdf [2014年10月]